

現地通信

南スラウェシ州ルウ県再訪

田 中 耕 司*

インドネシア南スラウェシ州のルウ県では、地域開発がいま精力的に進められている。カハル・ムザカルの内乱のため、同州でもっとも開発の遅れていたこの県は、水資源、森林資源に恵まれているだけでなく、低い人口密度のゆえにまだ広大な未利用地を残している。道路・橋梁の建設、灌漑施設の建設・拡充など、地域開発に不可欠なインフラストラクチャーの整備が進む一方、開発政策の一環として、インドネシア政府は人口稠密なジャワ、バリ、ロンボックなどからこの県へも集団移住者を送りこみ、農耕地を拓いている。いわゆる Transmigrasi 政策による開発がそれである。このような政府主導型の移住者のほかに、Transmigrasi spontan と呼ばれる自発的移住者もこの県へ流入している。南スラウェシ州で人口が比較的稠密なボネ、ワジョなどからやってくるブギス族、あるいはタナトラジャ県のマカレ、ランテパオなどから移住してくるトラジャ族などである。

Transmigrasi 政策を含めた種々の開発政策が政府主導で行われるのに対して、自発的移住者たちは独力で土地を拓き、未利用地を農耕地へとかえていかねばならない。幸い、未利用地が広いので、土地を手に入れるのは簡単だが、もともと出身地で恵まれていれば自発的移住は行われないので、彼らの多くは十分な資本もなく移住地の開墾にとりかからねばならない。従って、移住後の彼らの生活は決して安定したものとはいえないが、開墾にとり組む彼らの姿勢には、政府主導型の移住者にはみられない力強さをみることができる。彼らの最初の仕事は、入植地の森林の伐採と火入れである。焼畑耕作と同様の方法で、トゥモロコシ、イネなどが最初の耕地に栽培される。そして、この耕地をゆくゆくは、出

身地で行なっていたのと同じような水田や畑、樹園地へとかえていくのが、彼らの移住後の計画である。

わたしは、1980年12月から81年1月にかけて同県東部のウォトッ、マリリ両郡でこのような自発的移住者の開墾と定着過程について調査を行なったが、1982年12月に再び同地域を訪ねる機会をもった。2年を経過してこの地域がどのようにかわっていたか、またその変化のなかで自発的移住者の描いていた青写真がうまく実現されようとしているのかどうか、そんなことを現地報告として簡単に紹介してみようと思う。

2年ぶりに訪れたルウ県では、いまま道路の建設が最優先の事業として進められている。以前、県都パロポの北約 20 km までがアスファルト舗装にすぎなかった幹線道路は、ウォトッまでさらに約 100 km の舗装が完了している。残るは、ウォトッ郡東部からマリリまでの約 40 km で、この区間でも道路の拡幅が進行しており、早晚舗装が完了することである。以前はフェリーボートを利用しなければならなかったマリリ郡のパオスエ川やカラエナ川には、すでに仮橋がかけられ、その横で鉄骨橋梁の建設が進行している。道路の改良にともなって、雑貨品や食料品、燃料などを商う道路沿いの小店も増え、人や車の往来も増加している。ほぼ1日かかったパロポ-マリリ間の交通が、4時間余で可能となったことは、この地域を急速に県都パロポへと近づける結果となった。

道路の整備とともに、灌漑施設の建設も大きく進んでいる。ウォトッ郡のカラエナ川灌漑計画は、同郡の北、モンクタナ郡を流れるカラエナ川上流から取水し、両郡の水田に配水しようとする計画であるが、すでにモンクタナ郡の二期作化がほぼ完了し、いまウォトッ郡へと灌漑水路が延長されている。すでに同郡の東部・北部では幹線水路の建設が進み、

* Koji Tanaka, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University



ブギス族ウスマンの入植地。丁子園として開墾中。

計画地域への配水も時間の問題といえるであろう。

政府による種々のプロジェクトの進展に対して、自発的移住者の青写真はさほどの進展をみせていない。例えば、1980年にわたしがよく訪ねたブギス族のウスマンの移住地では、丁子やバナナの樹園地として将来利用しようとしている山麓部の開墾地は、前回訪ねたときよりも面積は拡大しているものの、樹園地特有の整然としたたたずまいを整えるまでには至っていない。むしろ、1982年の長びいた乾季のために新植した丁子苗が枯れてしまい、この1年間は耕地としての整備はまったく進まなかったというのが現状である。また、カラエナ川左岸に拓いた水田用地の畦畔造成にもまだとりかかれないうで、開墾後5年くらいで水田化が可能であろうと予想した彼らの見通しも、計画の遅延を余儀なくされているようである。

前回訪れた自発的移住者のグループのうち、もっとも組織的な移住計画をもち、すでに水田の造成も始めていたブギス族のある移住地では、造成された水田が荒廃し、丁子園の開墾も頓挫しているように見受けられた。聞くところでは、リーダーの運転資金もち逃げという思わぬ事件があり、当初の計画が破棄されて、移住地は出資者と開墾に従事した原住民とに分割され、まったく個人で農地造成にあたるようになったという。2年間の努力がまったく水泡に帰してしまい、いま新たな出直しを迫られているわけである。後者の例のように移住計画がまったく頓挫したところがあるものの、自発的移住者の入植はこの2年間に着実に増加している。以前は二次

林であったところが新たに開墾され、定住を始めた移住者たちの新しい家屋が散見される。政府のプロジェクトの進行にくらべて遅々とはしているものの、自発的移住者の流入はこの地域の農業のすがたを大きくかえていくものと思われる。

政府のプロジェクトの進行と自発的移住者の青写真とが抵触することも、今後の問題として生起してこよう。例えば、彼らが開墾した土地を政府プロジェクトの計画地域に組み入れようとする動きも出ている。ブギス族の自発的移住者約80家族が定住したウォトゥ郡のジャランサエレでは、1970年代後半にはほぼ定住が完了し、丁子を中心とした樹園地と水田の造成が計画されていたが、いまこの土地が政府のアブラヤシ・プランテーションの造成計画によって、再び公用地として接収されようとしている。彼らの開墾地も含む広大な地域が開墾され、同時に彼らの開墾地を政府が買い上げ、プランテーションの造成および開墾後の樹園地管理の仕事に彼らに従事させようというのが、計画の内容である。移住者たちはほぼ原則としてこの計画を受け入れつつあるように見受けられたが、なかには、せっかくの開墾地を提供しなければならないことに強い不満をもちつつも、仕方がないのでこの計画に応じているという人たちもいる。また、一方では、政府に売り渡す土地にかかわって、それを資金に新たな土地を入手すれば、プランテーションで働くかわら自作地の農業も進められるというわけで、この計画をむしろ歓迎する人たちもいるとのことである。政府の開発プロジェクトが強力に進められているだけに、もともと何の援助も受けていなかった自発的移住者たちは、今後さらにさまざまな対応を迫られることとなる。

自発的移住者が彼らの計画どおり定着できるかどうか、2年間のわずかな変化のなかからはまだ明確な結論を出すことはできない。ただ、この地域の開発が急速に進んでいるだけに、新しい移住地への技術的な適応だけでなく、経済面での適応も慎重に検討されねばならない時期に到達しているように思える。あと半年のジャカルタ滞在中に、彼らの開墾・定着過程をさらに詳しく調査できる機会があればと思う。(京都大学東南アジア研究センター助手)